漢詩鑑賞　令和七年一月　　　　　　　　　　　　玉井幸久

　朝鮮之役載一梅歸栽之後園詩以記

　　　　　のにをせてりをにえてす

絶海行軍歸國日　　　しての

鐵衣袖裡裹芳芽　　　　をむ

風流千古餘清操　　　　をす

幾歳閑看異域花　　　にるの

【通釈】

　起句　海を度ってに出かけ、国に帰る日、

　承句　の袖に梅の若木を包んで持ち帰った。

　転句　この梅の優雅な品格は何時までも清らかなおもむきを保っていて、

　結句　あれから毎年、心静かに異国の花をでているのだ。

【語釈】

　朝鮮之役…文禄・慶長の役（一五九二―一五九七）。

　載…舟や車にのせて運ぶ意。

　後園…家の後の庭園。

　絶海…①海を渡る。　②遠く陸を離れた海。　ここでは①。

　行軍…軍隊を進める。

　鐵衣…よろい。　鎧。

　裹…包む。

　風流…みやびやかなこと。　品格の優雅なこと。

　清操…清いみさお。

　異域…外国。

【押韻】

　平声　麻韻。芽、花、

　起句は踏み落とし。

【解説】

　伊達政宗（一五六七―一六三六）は戦国末期から江戸時代初期の奥羽の武将・

　仙台藩主。関が原の役に東軍に属し、仙台藩六十二万石の基礎を固めた。大阪の

　陣にも功をたて従三位権中納言の位階にのぼった。

　幼少の頃より禅僧に学問・詩文の手ほどきを受け生涯に三十余首の漢詩を残した。

　この詩は政宗晩年の作。それより前、文禄二年（一五九三）政宗二十七歳の年、兵

　を率いて海を渡り朝鮮の戦いに加わった後、帰国の際に持ち帰り庭に植えた梅樹

　について詠んだもので、その梅樹は今日尚現存するとされています。

　詩は前半のいかにも戦国の世らしい表現と、後半のみやびな表現が融合し、武将の

　風流心が格調高く詠じられた美しい詩となっています。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上